第１１期　第３回鳥取市校区審議会　議事録

１　日　時　　平成２４年２月２４日（金）午前１０時～午後１２時０５分

２　会　場　　鳥取市役所第２庁舎　５階第１会議室

３　出席者　　【委員】
渡部昭男委員、岩崎憲一委員、渡邊勘治郎委員、長尾志保委員、上山弘子委員、
神谷正惠委員、有本喜美男委員、前田多喜男委員、八木一元委員、
横西経雄委員、福安　修委員
【アドバイザー】
とっとり地域連携・総合研究センター　古川義秀サブディレクター
【教育委員会（事務局）】
橋本佳忠次長、松ノ谷博参事、平井圭介参事、橋本浩之課長補佐、
清水圭二主任

４　会議次第　　１．開　会
２．会長あいさつ
３．議事録署名委員の選任
（前田委員、八木委員　選任）
４．報告
（１）第２回会議概要
（２）高松市における校区再編視察結果について
５．議事
（１）校区再編について
６．その他
７．閉　会

５　議事の概要

発言者	発言内容（要旨）
事務局	第３回鳥取市校区審議会を開会します。 出席者の確認ついて、２名の委員が欠席ですが、過半数の出席がありますので、会議は成立いたします。 会長に挨拶をいただき、引き続き進行をお願いいたします。
会　長	今回から本格的な議論に入りますので、よろしくお願いします。 議事録署名委員の選任ですけれども、２名の委員にお願いします。 早速ですけれども報告事項に入ります。事務局で報告をお願いします。
事務局	報告事項（１）及び（２）を報告。 （レジュメ資料２～９ページ）
会　長	高松市視察について、参加された委員で印象や参考となること等、ご報告いただけることがあればと思います。
委　員	高松市では、地域での説明会に相当苦労されたように感じました。また、校区等を審議した委員はあまり地域での説明会等は出席していなかった様で、余計に反対運動に火を着けたような印象を持ちました。

	本審議会も今後議論を進めるわけですが、地域へ出かけて意見を吸収することや、どこを窓口にして懇談を進めるのか等、これまでも鳥取市では取り組んでいますが、ますます重要であると感じました。
会　長	地域との関係は、鳥取市の方が丁寧な感じがしました。
事務局	そのことについて補足ですけれども、説明会に審議会委員がどれだけ出席したかということについて視察の時に数字がはっきり出てこなかったので、後から資料をいただいたものがありました。高松市では中間報告の説明会を各地域で１０回近くされていますが、そこには審議会委員の出席はなく、その後のＰＴＡ代表者から意見を聞く会を２回行われておりまして、そこには審議会委員が出席されています。それから答申が出た後の説明会にも審議会委員は出席されていないようでして、出られたのは中間報告の後のＰＴＡとの話し合いだけのようです。
委　員	教育委員会は地域の実情を知らないという発言もあったように資料を見ました。審議会自体も公開されなかったようですし、情報化社会における対応が悪かたのではないかという印象を持ちました。
委　員	新しくできた小中一貫校の第一学園の規模の大きさには、驚きました。あれだけの建物と設備で子ども達には夢があったのかもしれないけれども、公立学校であそこまでできるのかという印象が残りました。
会　長	施設整備の面では予算規模が大きく違いますので、あまり参考にならないと思います。
委　員	統廃合については、現在取り組んでいるもの以外は考えていないということでしたが、人数の少ない学校もいくつかあるのにどうしてかなと思いましたが、高松市は島があり、島の学校は統廃合できないということで、そうだなと思いました。 あと、学校統廃合については財政指導的と感じました。
会　長	旧町のところはいじらない、高松市街地のところだけということでした。
委　員	中間報告の後、小中一貫校が計画の視野に入ったということで、これまでなかった教育設備に住民の方も期待し、一貫校の導入の現実化により新しい立派な施設が出来るということで、住民も納得したのではないのか、という感じがしました。 高松第一学園は備品を含めると６０数億円を使ったという短大が１つできるような感じで、あれほどまでにお金をかけないといけなかったのかという気がしました。全て素晴らしい材料が使ってありました。
ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	委員も言われましたが、進め方について、鳥取市の校区審議会も終わった後ホームページ上でずっと公開されていますが、当事者、保護者の方となると自分の身にかかってこないと、なかなか動きが無いのだろうと思っています。そういう面では鳥取市の校区審議会においても、いつの時点でこの校区が議論の対象となっていますということを当該地域の方にお知らせするのか、そのタイミングが一つ考えどころになると思います。問題や提起もない状況で発信しても受け答えができませんし、と言ってすでに固まってしまったものを出しても、地域の意見を聞いていないという話になりますので、その辺り出すタイミング見て、且つ早めにこの地域が対象となって検討しますということをお知らせし、進めていくということが大事ではなかろうかと改めて思いました。
副会長	高松市は施設の老朽により建替え等が必要だったという状況があり、鳥取市に置き換えていくとほとんどの中心市街地の学校は建替えが終わった後の段階ですので、これをどういうふうに参考にするのかということを思いました。資料にも書いてありましたが、やはり高松市の場合は設備の更新ということで住民が納得した部分が強かったのではないかと思います。鳥取市では、建替え等が終わった後の段階で校区を再編していくということは、なかなか大変だという印象は持ちました。

会　長	大きくは３点ありまして、１つは、プロセスで先ほどｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰも言われたように、どういうふうに住民としっかりと、そして委員からもあったような教育委員会の役割とこの校区審議会の委員の役割の区分と連携をしっかりしながら、チームワーク良く住民と提携していくかということだと思います。高松の場合は大変大きな立派な学校が出来ています。いいものが出来るから最終的には納得してもらえた訳でありますが、鳥取市の場合はプロセスを大切にして、どういうふうな学校と地域の関係をつくるのかということを財産にして取り組めればと思います。 ２つ目は、高松市では出来た後地域との環境をつくる仕組みとしてサポート協議会や学校づくり協議会という取り組みがあります。鳥取市も現在佐治と用瀬の中学校を新しく創ろうとしているところですけれども、新しいものを創るためにはやはり応援団が必要ですので、その辺りをしっかり創る。いわゆる答申が出て終わりではなく、答申を出した後も含めてどういうふうに創っていくかということが重要であるということでした。 ３つ目は、地域との関係の中ではカリキュラムや実践が非常に重要で、確か市民科、又は高松市教育だったと思いますが、高松市の未来を一緒に考えていくような総合的学習が行われていました。新しい学校をつくり地域のことを考えていくといった、教育課程や教育実践を取り組んでおられました。また、英語教育等、子ども達にどういうふうな学力をつけていくのかということも含めて展開されていることが重要だと思いました。 色々な仕組みがあり、その中には小中連携とか小中一貫というのも一つの選択肢として入ってきます。第１０期のイメージとしては鳥取市の場合は、小学校は地域コミュニティにできるだけ根ざしながら、そして中学校は適正な規模を維持していくというような、鳥取市方式のようなものが議論されたと思います。単純に学校規模で考えて数合わせをしていくというよりは、６歳から１２歳の児童期、１２歳から１５歳の思春期の教育の特色を踏まえたうえで、また小中の連携をどうするかという辺りが議論出来ればと思ったところです。
委　員	高松第一学園のような「学園」と普通の「学校」とがあるのですけれども、その違いは小中一貫だから「学園」としたということですか。いわゆる進学、エリート校ではない訳ですね。
事務局	湖南小中学校も統合にあたりまして、湖南学園という名前にしました。それは、特定の進学ということを目指したわけではなく、学校体制の中で湖南学園の場合は、校長、副校長、教頭の３名の管理職による体制で小も中も両方みています。そういう一貫した教育を進めるということで、他府県の例を見ると「学園」という名前を付けたところが多くあった関係で「学園」と付けたと思われます。 基本的にどこの学園も地域の課題をどう解決するか、地域の中でどう子どもを育てるかということを一つのテーマにしたようなカリキュラムが組まれているところが多く、特定の進学というようなことではないということです。
委　員	話を先走るようですが、進学、エリート校のことで、東京の方では小中一貫校のような取り組みをされているのですか。近年学力が伸びているように聞きます。鳥取で中高一貫校をつくるということがあり、そういった形で底上げをする、小中でエリート校をつくるということも一つの考えかなと思います。
会　長	県東部で中高のことが出ていて、鳥取大学が撤退して、その後県立でという話がありましたけれども、それに関してその後情報がありますか。
事務局	子ども達の学力については、全国学力学習状況調査が一律に行われ、昨年度は震災の関係で中止になりましたけれども、鳥取県及び鳥取市は全国トップクラスの結果が出ていますので、皆さんも知っておいていただけたらと思います。

	それから、中高一貫については、会長からも話がありましたが、色々な形で中高一貫という形が模索されていると聞いておりますので、それが公立なのか私立なのかという問題はあると思いますが、県の教育委員会を中心にこれから具体的な話が出てくるのではないかと思っていますので、その動きを見守りたいと思います。校区審議会としてもそういう動きを注視しながら進めればと思っております。
会　長	高松市の栗林小ブランドというようなことは、そういう進学等の背景があるかもしれません。その他高松視察報告について質問はございますか、なければ議題に進みます。 それでは議題１の校区再編について、事務局で準備していただいた資料に基づいて、説明をお願いします。
事務局	議事１校区再編について説明。 （レジュメ資料１０～１６ページ）
会　長	この後、１０ページの一覧表に基づいて意見交換したいと思いますが、意見交換がスムーズに進むように会長からこの１０ページの提起について少し方向性を提起してみたいと思います。 まず、過小規模校で小学校と中学校の間にラインを引いて、小学校問題と中学校問題ということで、少しメリハリをつけて議論をしたいと思います。小規模校の逢坂小学校から明治小学校までのところが１つの問題、それから鹿野中から福部中までの中学校が２つ目の問題ということです。 次に適正配置のところのＣ３が現在では優先度合のランクから外れていますけれども、第１０期の議論を引き継げば、中心市街地における統廃合をどう考えるかということを落とすべきではないと考えています。ここのところは統廃合での３つ目の問題になるということで、統廃合問題では、１、２、３という３つの問題を扱っていければなと思います。 あと校区の見直しについては、ご指摘いただいているＣ１、Ｃ２のところに加えてＡ３の中学校での過大規模の問題を少し視野に入れて、３つの問題ということで扱えればと思います。 Ｂ２の問題はＣ１のところにすでに挙がっていますので、Ｃ１に組み入れて議論できればと思います。 もう一度整理すれば、統廃合の問題で今もうすでに過小規模のところの①小学校問題、②小規模の中学校問題、③中心市街地の小学校問題という３つの問題。校区の見直しについては、①近くに別の学校があって保護者から要望がでている問題、それから②校区と自治会が整合しない問題、③過大規模が想定される中学校問題、というイメージで進められればと思います。 それから報告事項のところで１点気になりましたが、用瀬と佐治の中学校の問題について、学校のスタンスが非常に消極的すぎる感じを受けました。これから新しいコミュニティの中学校をつくるわけであって、行事等で学校への負担がどうだとかいうことではなく、用瀬と佐治の地域に対して新しい中学校がどういうふうな連携を持つのかというスタンスで学校はリードしてもらわないと困るのではないでしょうか、従来からの行事への関わりや負担が増える等という議論をしているのではなく、新しい中学校を地域との関係でどうつくるかという議論をしている時に、そういう発言をすべきではないと思います。新しい中学校をつくるという姿勢に欠け、校区審議会が出した意向とも少し矛盾がありますので、その辺りを理解していただくようにしてください。 では、順にご意見を聞いていきたいと思います。
委　員	ここに書いてある一番上の小規模校５校あるのですが、逢坂小と瑞穂小は旧気高町で、ここにはこの２校しかないのですか。 それから、神戸、東郷、明治は旧鳥取市ですが、これは同じ谷になるのですか。

事務局	気高地域には、この２校以外に浜村小と宝木小があり、全部で４小学校あります。宝木小もそう多くはありませんが、その内、逢坂と瑞穂が少ないです。 それから神戸、東郷、明治については、谷が全て違います。
委　員	神戸、東郷、明治が統合すれば相当の通学距離になるということですか。
事務局	谷が全て違うので、相当な距離になるとは思いますが、この３校の統合ということは、現実問題難しいと思います。
委　員	智頭町は５小学校を智頭小学校１校にするということですが、大分前になりますが、中学校を最初に統合しています。青谷町も色々反対もあったけれど５校を１校にしています。統合する場合に旧町単位でするとまとまりやすいのではないかと思います。 それから１番の問題は中心市街地の問題です。これは非常に距離が近いということで、例えば遷喬と久松は中学校が同じ北中ですので、くくりやすいかなと思います。 富桑と醇風を一緒にすれば同じ西中ということで、そういうことを言う人もいます。 中心市街地の統合については、相当大胆にやったほうがいいのではないかと思います。 先日の新聞に倉吉市の方針が出ていまして、倉吉市は現在小学校が１４校あり、それを８か９校に統廃合するという原案３つのパターンをつくって、住民説明会を開くということです。例えば倉吉は旧倉吉町時代から中心的な小学校は、成徳と明倫ですけれども、これをどのパターンも他ともくっ付けたりしながら成徳と明倫を一緒にすると、鳥取市で言えば久松と遷喬を一緒に、或いは醇風も加えるというような大胆な答申のようです。鳥取市は先ほど説明された資料１０ページの小規模校５校程度では、少し遠慮がちという感じがします。
会　長	委員の発言としては、Ｃ３の中心市街地も議論に加えて良いということで、よろしいですか。 では、委員のご意見を聞いていきたいと思います。この１０ページで今○印が付いているのは結論ではなくて、議論の優先度合も含めてということですので、少しご意見をいただけますでしょうか。
委　員	ここにあります山間部、中心市街地というのは、一緒に議論するということでもいいと思いますが、それぞれ個々にとっては非常に大きな問題があると思います。一緒に進めていたら何年もかかることになってしまうと思うので、手がつけれるところから進めていくということもあると思います。 審議の中で同じように話題には挙げても、進めていくのは取り組めるところからしたほうが、解決は早いのではないかという感じはします。また、情報公開で色々なところに情報が流れますと色々な意見が出てきたりして、自治会とのやり取りや、住民との話し合いでも非常に大きな問題もおこると思いますので、広げ過ぎずこういう形でいくのもいい方法ではないかなと思っています。
委　員	今後のスケジュール案も提案され、高松の視察報告の中でもありましたが、地域の住民とのプロセスを大事にしていかないといけないということがよくわかりました。６月に過小規模校の問題を提起し、結論が出る前にきちっと住民の方々のご意見を聞くことはいいことだと思います。保護者は児童数が減っていることは実感していると思いますし、メリットも感じています。またデメリットという意味では、学級の人数が少ないということに対しては特に実感していることだと思いますので、その実態を踏まえて意見を聞くという懇談会を開催していただくことで、考えるきっかけになると思います。特に過小規模校のことに関しては、その方向で進めていかなければいけないかなという感じを持ちました。

会　長	特にＡ１のところは、現場に出かけて行って、じっくり意見を聞いていこうと、まずそれが必要ということですね。
委　員	小学校と中学校を分けての議論ということですけれども、福部中学校はわずか８０名ほどの生徒しかいない中で、地域でも一貫校にしたいという意見もかなり出ています。出ているのですが、以前市教委に来ていただいて説明を受けた時に、地域の思いが表に現れ、どちらかと言うと地域が先頭に立って一貫校を進めていかなければなかなか難しいという説明でした。高松市の話とはまた違うのですが、高松市はおそらく行政主導で一貫校をつくられたのではないか、様々な問題がある中で一貫校というものをつくって納得させたのかなという気はします。その辺りで地域の方々は、いったいどういう方向で一貫校をするならする、しないならしないという議論を進めていったらいいのかという、非常に悩ましいところで保留状態のような格好になっています。ですからこの校区審議会がどういうスタンスで一貫校を進めるのかということをある程度リードして下さるのか、そうではないのかというところも非常に大きいところだと思います。 それと、福部は１町に小学校１つ、中学校１つ隣接して建っていますけれども、小学校は資料に挙がってきていないけれども、いずれ中学校は８０名が７０数名、６０ちょっとというような数にはなってくると思うのですけれども、その辺を考えると単独で挙がってくのではなくて、小学校との絡みも考えていただきたいということもあります。小学校の地域性という考え方もありますが、地域によっては中学校との絡みも出てくると思いますので、その辺りも含めながら議論していけたらと思います。
会　長	福部の問題は第１０期から出されていましたが、第１０期の時は佐治・用瀬が優先になりましたので、現場に足を運ぶことはできなかったのです。けれども、この福部中で挙がっている問題で話し合いをということになれば、当然小中一貫校問題ということも含まれることになると思います。
委　員	今期の審議会が始まって２年で答申ということでスケジュールが組まれて、それに沿っていくためには、各地域の意見を聞く意見交換会がそれぞれの課題で３ヵ月ずつ６月から８月までということで設けてあるのですけれども、それで果たして十分な意見が聞けるのかなという不安が少しあります。けれども、時間が限られているので答申に向けてしっかり議論が出来ればと思います。
会　長	丁寧なやり取りをしながら、でも時間が限られているので、その中で丁寧にということですね。
委　員	資料の優先順位はいいと思いますが、Ｂ２についても議論していただきたいと思います。具体的に城北小学校、八千代橋等となっていますけれども、美保小、明徳小、日進小に関わる部分で、例えば富安１・２丁目が橋を越えて美保に通っているという危険な要素があるわけですから、同じように優先度を上げていただきたいと思います。
会　長	校区問題の見直しで、距離だけでなく安全性も大きいと思いますので、当然結びついてきます。表の上でも優先度を上げるというご意見をいただきました。
委　員	中心市街地の問題が抜けているのが問題かなと思います。 やり方については、言われる通り鳥取市校区審議会は鳥取市全体の校区のグランドデザインを描き、大きく網をかけて進めていかないと体系的にとれないと思いますが、といってそれをしていたらいつまでたっても前に進まないので、個々に解決していかないといけないと思いますし、どういう格好でやるべきかと悩んでいます。 しかし中心市街地のことを置いといて、小規模校だけ取り組んだとしたら、校区審議会の全体の考えはどうかということがでると思いますので、まとまらないですが、全体像をまず書かないといけないのかなという気はしていま

	す。
会　長	大きな全体像は第１０期で出したつもりですので、今回第１１期では個別校の問題に入っていければなと思っています。 中心市街地の優先度については、先ほど言いましたように優先度を高めて、議論をするように考えています。
委　員	資料１４ページの表に現状と将来推計ということで、まとめていただいてあり、また、例えば過小規模校の神戸小と美和小等、谷ごとに抱き合わせで整理されてありますので、こういった限界集落傾向にあるところを優先して統廃合等の考えをまとめる方向がいいと思います。該当地域は住宅団地等がすぐにできるということも望めませんので、既存の家族構成のまま推移し、人口の急激な増加が望めないと思います。そういったことから神戸小や東郷小、明治小、それから気高地域の逢坂小、瑞穂小について、同じ谷ごとに統廃合等の答申を打ち出せば、わりと地元にも受けやすいのではないかと思いますので、まずそういった学校について、優先的に統廃合に向けた考えを地元に説明できるような形にまとめた方が良いのではないかと思います。 それから中心市街地については、審議していく過程で久松と醇風と遷喬小学校の統廃合を視野にいれた提案でもいいと思います。
委　員	まず手を付けるべきはどこなのかということを考えていくことが必要だと思います。その時には、兵庫県の豊岡から生まれ育った、日本教育の国宝と言われる東井義雄先生が「地域の為に学校が在るのではない、子どもの為に学校が在るのだ」と言っておられるように、子どもの為に考えるのであれば、手をつけられるところからやっていって子どもの教育環境というものをつくっていってやるべきだと思います。 今鳥取市が抱えている課題というのは、まずはいかに５年先、平成２９年までで極端に減るところ、そういう学校をどうするのかということだと思いますので、ご意見のあったような大きな括りをして大胆にするという考え方も含めながら議論を進めていければと思います。 手続きや手順については、先ほどからも話があるように、地域との話し合いを十分に持ち、地域の人の考え方を理解しながら議論を深めていかないといけないと思います。 そうすることで、学校と地域で子どもを育てる環境が出来上がるのではないかと思います。
ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	基本的にはこの第１１期校区審議会というものは、第１０期の中間報告で出てきたことが基本になると思っています。その中では、子どもというのは学校だけが育てるのではなく、地域も育てるということも言っていますし、資料１０ページにある基準もそれに沿って出された課題であるので、まずはそういう共通認識を持って関係をつくっていかないといけないと思います。 それから、全体スケジュールとしては、会長が提案されたような形でいいのかなと思いまして、特に学校規模の問題、過小規模とか過大規模というのは、考える上で適正規模になっていないから問題があるのだということですので、まずこの課題となっている学校がどうすれば適正規模になるのかということを考えないといけないだろうと思います。議論の取り掛かりは図面を引いた格好なのかもしれないけれども、そういった形でとりあえず案を示して、そのうえでまちづくりや様々な形、課題等が出てきて、それに対してどう対応していくのかということになると思っています。まずは、その課題となるもの、基本として考えないといけない土台というものをつくりあげることが一つのポイントだと思っています。 それから、共通認識として小規模校のメリット、デメリットとありましたけれども、実際には学校運営や校長の方針、児童生徒の性格といいますか雰囲気等で、その都度メリットになったり、デメリットになったり変化や影響が出てくると思っていますので、改めてメリットはこういった項目で、デメ

	リットはこうとこだわらず、こういうこともあります、という程度の認識でいいと思っています。
副会長	学校統合の問題は、鳥取市で今起きている以前としては、世紀小学校が出来た時と、城北小学校が出来た時だと思います。それ以降は小中学校の分割はあったと思いますが、統合はなかったと思います。城北小学校、世紀小学校が出来て５０年経ちますが、未だに同じ問題提起がされるのはどういうことなのかと思います。 ５０年前以前は一つの村に一つの学校があったのですが、世紀小学校というのは、松保村の小学校と豊実村の小学校を一緒にし、城北小学校は、中ノ郷と千代水の小学校を一緒にしました。この時に結局自治会との関係の中で、現在までの問題が残っているのではないかと思います。 ですから自治会とどう調整を図りながら、校区問題を解決していくのかということが、非常に必要だと思います。この関係がもつれると５０年経っても校区問題として継続していかないといけない地域が出てくると思います。 もう一つの地域としては、雲山の米里小学校の問題です。これは雲山が面影村の一部で中心にあり、面影小学校がありました。ところが、面影小学校の規模に対し、おそらく雲山の宅地造成となった時だと思いますが、雲山の児童数が増加しすぎて、面影小学校だと施設として足りないということで、その時人数の少なかった米里小学校の校区にしたというような地域の分断がありました。 それから、上段、上原の問題は、明治村の上原や上段、その辺りを世紀小学校にくっつけたのですが、村としては明治村で一つのコミュニティがあったので、地域を二つに分けてしまい、そのことでこの問題が以前から取り挙げられてきていると思います。 こういう時にもう少し地域コミュニティと話をしながら物事を考えて取り組めば、問題は大きくならなかったのかなと思います。 そういった経緯で起こった問題だから、先ほど話で、自治会や地域に返すと問題が起こるというのは、その辺りがあるからだと思いますので、そういったところに今後どういう形で接していって、どう取り組んでいくのかなという気持ちを持っています。 それから中心市街地の問題に関しては、中心市街地の過小化していく部分は残しながら、山間地域の小さい学校は統廃合の取り組みをすることに対して、なぜ中心市街地の小さいところが残っているのに、山間地で統合すれば地域も広く通学距離も長くなるのに一緒にならないといけないのか、という意見が出てくるのではないかと思いますので、その辺りのことを委員の中で議論をしてどういうふうに解決していけるかなと思っています。 もう一つ事務局にお願いしたいのですけれども、ここに取り挙げられている地域で、３０年、５０年前から継続して問題にされていると思いますが、これまでにも何回か校区審議会の中で答申が出されていると思います。それがなぜ実施できなかったのかなということを一度調べていただいて、そういうことが一つの問題解決の糸口になるのではないかと思います。
会　長	これまでの意見をまとめてみたいと思います。 まず第１０期での議論を少しお伝えしますが、意見があったように鳥取市のやり方は外から見ていると少しまどろっこしいような印象を与えているのかもしれません。しかし、鳥取市の校区審議会の考え方の基本は、「まず子ども中心」ということでした。子どもの成長、発達のために学校、地域がどうあるべきか、ということですので、学校の数合わせという結論的なことを校区審議会や行政は示さない、むしろ子どもがどういう状況にいるのかということを丁寧に踏まえて、議論をしていこうということが一つです。 二つ目は、先ほども言いましたけれども、校区審議会は校区の線引きや合わせるということも考えますけれども、学校と地域の在り方をもっと問い直

	したいということです。以前の校区審議会は課題が挙がった時だけ、どう線引きをするかという臨時的な会議が多かったのです。現在はほぼ常設的に開催しているというのは、鳥取市域におけるそれぞれの学校が、子どもを育むという意味合いで、どういうふうに地域と学校がよい関係が取れるのかということを、常にチェックしていこうという意味合いがあります。 　そのうえで、今回新たに提起したいのは、先ほども言いましたが、義務教育の９年間を一律に扱うのではなく、義務教育の小学校６年間と中学校３年間という児童期及び思春期の発達段階や発達課題の違いを押さえながら、時には小中一貫や小中連携のように連携の視点も踏まえていくということです。ですから、単に小学校が過小であるからということで議論するのではなく、その地域の子育ての考え方として小さくても地域で守り発展させていきたいという地域もあれば、ある程度の規模を維持したいので統合したいという地域もあると思います。例えば今５つ過小規模の小学校名が挙がっていますが、一律に進むのではなくて、その各地域の考え方をきちんと押さえていこうということです。 　それから二つ目は、第１０期でも提起したのですが、まだ十分位置づいていない観点があります。人口拡大期の分割問題から、いま日本全体は人口減少期の課題へと向かっています。しかし、その時の手法を我々はまだ持てていません。そこで提起したいのは、「ファミリー校」や「兄弟校」という考え方です。一緒になるところが連携した実践を先に進めなければ、どう合わせるのかという議論にはなりません。今回の佐治、用瀬についても、中学校新設統合が少し先にスタートしましたが、新しい中学校の基に小学校や幼稚園、保育所もくっついているぶどうの房のような新しい地域連携の下で、そのコミュニティがどういうふうな環境をつくっていくかということです。そういう意味合いでは、先ほど意見もありましたが、資料１４ページのところでは、どういうファミリーをつくるか、どういう兄弟をつくるかという提案が本当はなされていると思います。これは統廃合の問題だけではなく、例えば、もっと兄弟校としての行事や交流の取り組みを実施していくところや、分校や分教室のような形で小さくても地域にも残すところもありますし、うちの地域は統廃合しますという結論が出るところがあるかもしれません。ですから、統廃合をするかしないかという議論の中に連携した学校関係や行事をどうつくるのかというスタンスを入れていく、これが鳥取方式だということです。そのためには過小エリアだけでなく中心市街地も非常に近いところにあるわけですから、中心市街地のファミリー校、兄弟校を明らかにして、共通の取り組みをしていただく中で、合わさった方がいいだろうとか、分校・分教室方式で行きたいのだとか、様々でてくると思います。そういう意味合いで、統合に進む一つ前のプロセスとして、ファミリー又は兄弟というような学校間のつながりのようなものを、校区審議会としては示すことを考えていきたいと思います。 　それから資料１０ページについては、Ｃ３の中心市街地問題はやはり落とせないかなと思います。最終的な答申の中にどう入りこむかは別にして、議論のプロセスには落とせません。それから意見がありましたＢ２の距離や安全性の問題についても、優先度を上げた形で議論の中に入れていければと思います。 　それから、Ａ３は特には技術的な問題ですが、良ければ校区の見直しのところで議論はしてもいいようには思います。
事務局	過大傾向の南中ですが、数年後に過大化の要因はありますが、未確定な要因もありますし、その後は落ち着いてくる予測ですので、すこし微妙なところです。校区の見直しということも想定として色々考えてはみるのですけれども、なかなかうまくいかないと言いますか、例えば最初に考えたのは、日進小を東中校区に変えたらどうかと考えたのですけれども、そうすると南中

	のすぐ目の前まで日進小校区があり、目の前の中学校から遠い中学校に通わせるのかという話になってしまいますので、別の線引きをしない限りは、校区で調整ということは困難だと思います。
会　長	それでは、もう一度整理しますと、資料１０ページは、Ｃ３のところも協議の優先順位としては高いものに上げ、Ｂ２についても同時に協議していきます。 それから資料１４ページにある案については、統廃合まずありきということではなく、関連校ということですので、ファミリー校や兄弟校のような関わり、つながりを校区審議会としては積極的に示しながら協議をしていくということで、整理したいと思います。
副会長	関連校のところで、瑞穂と逢坂の場合、浜村小学校としか出ていませんが、自治としては鹿野小との関係も深いと思いますので、その辺りも挙げていただきたいと思います。
事務局	認識はありますので、議論の中で出していきたいと思います。
会　長	次回は、少しファミリー校のようなつながりのところでのご意見をいただきながら、どことどこを連携させながら議論していけばよいか、先ほど福部から出たような小と中を合わせて一緒に議論するということも出てくると思います。 ペアを組む場合には相手をどう設定するのかというところが重要となります。そういう設定ができれば議論が始まってくることになると思います。
委　員	提案のあったファミリー校の考え方はいいと思います。その下地として、各学校現場の管理職の方々が、それぞれが独立国家的な考えではなく、交流し合うということを積極的にしていただければと思います。例えば学校行事、発表会や運動会に呼んだり、呼ばれたりして出かけていって交流する等をしていただいて下地が出来れば、議論も前に進みやすいと思います。
会　長	今回、小中学校校長会の委員が欠席ですので、その辺りをしっかり伝えて、議論の中に活かせていければと思います。
ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	一つ提案ですが、先ほども校区を変更したら学校が近くになったり、逆に遠くなったりするところがでてくるという話は、まちづくり、都市計画の部分と関わってくるところが大きいと思います。特に中心市街地の学校の話をすると、合わせた時にどの位置がいいのか、空いたところに新しくつくるのか等、都市計画としてどういうふうな形で学校を位置づけるのかという話も重要になってくると思いますので、アドバイス的なものでもいいですし、考え方等を聞いておかれる分でもいいと思いますが、都市計画の関係の担当課の方にもオブザーバーで入っていただいたらどうかと思います。
会　長	次回事務局にお願いしたいのは、つながりをどういうふうにつくって議論を進めていくのかという案を出していただけますでしょうか。それから、そのつながりで進めた場合、どの自治会が議論を進める土俵となり、協議のパートナーになっていくのかという辺りも、少し見えるような形でだしていただければ、地域とのつながりや自治会とのかかわりが見えてくると思います。
委　員	話をしていく中で、各小学校の位置図が無いと、話が頭に入ってこないことがあるので、資料として付けていただきたいと思います。
委　員	今後の要望ですけれども、佐治・用瀬の統合準備会も３回されており、校区再編の特徴的な事例でもありますし、報告資料を添付していただきたいと思います。 それは情報公開や意見交換のプロセスにおいて、佐治・用瀬のケースで若干反省すべき点があると思われることが出てきているので、これから他地域の取り組みにおいて、地域に出かけて委員が対応する場合、今後のやり方等に大いに参考になると思いますので、前例となる佐治、用瀬の統合準備会の状況をポイント的に報告いただきたいと思います。
事務局	事務局側の対応につきましては、改善できるところは行っていきたいと思

	います。 　ファミリー構想の話がありましたが、今全市で中学校区での取り組み、小中の一貫教育ということを進めています。どういうことをしているかと言いますと、これから３年間でその基礎をつくろうとしているのですけれども、この１年間は中学校区の全小学校と中学校が相談をして、その校区でこんな子どもをつくっていこうという大きな目標づくりをしています。「目指す子ども像」という言い方をしていますが、それぞれの地域に特色がありますので、この地域はこんな子どもをつくろうということを共有して取り組もうということです。そのための仕組みづくり、理念づくりを進めております。来年度から具体的な子ども同士の交流、先生達の交流が目に見える形で進んでいくと思います。こういうものが提案された「ファミリー構想」の基礎となると思っていますので、紹介させていただきました。 　さて、校区審議会ですけれども、今回の２月定例市議会で、代表質問として質問が出て、機が熟してきたのかなという気がしています。 　これまで理念等を考えてきていただいたものが、ようやく市議会という場で公になり、これからどんどん地域に広まっていきますので、これを機に進めていく時期ではないか、そういうタイミングに来ているのではないかという気持ちです。 　先ほどの話の中で理念とプロセスという話がありました。その通りだと思います。鳥取方式ということもありましたけれども、本当にこの校区審議会の議論は、鳥取の子ども達の未来のためだと思っていますので、そのことをしっかりと肝に銘じながら委員皆さんの多大な力をお借りし、色々な意見を聞かせていただいて、鳥取の１万５千人の子どもの未来をつくっていただきたいと思います。よろしくお願いします。 　本日は、ありがとうございました。
事務局	以上で第１１期第３回校区審議会を閉会いたします。